

企業

次世代を想い、10年後の未来を思い描きながら

大崎市

山田 好恵 株式会社一ノ蔵

取材日 2013.06.12

可能な限り復興支援に携わりたいと、故郷石巻市と勤務地大崎市の両方のエリアに軸足を置き、個人では門脇小学校への支援（アートチャリティ展）、仮設住宅との交流、東北グランマ支援、ベガルタレディース活動支援に取り組み、株式会社一ノ蔵の社員としても「ハタチ基金」への寄附継続、大崎ふゆみずたんぼ広め隊としての活動を行なっている。

3月11日 14時46分

会社にいる時に地震にあった。会社は鉄筋コンクリートの4階建てだ。震度7の地震には耐えられる建物だと日頃から言われていたが、事務所ではいろいろな物が倒れ、このままでは建物が崩れるのではないかと命の危機を感じた。ようやく揺れが収まり、上履きのまま外へ避難した。日頃の訓練のおかげで社員がパニックになる事はなかった。その時は役員が全員外出しており、製造顧問がトップであったので顧問が先導し、管理職が中心となって担当部署の社員の安否確認をした。製品課は特に女性社員が多く、子どもの安否を心配して早く帰りたい様子だった。その日は管理職と蔵人の一部社員が会社に残り、他の社員を帰宅させ、管理職は翌朝8時半に集合する事を決めた。私は当時中学2年生の娘が心配で、何としても早く石巻市にある自宅に帰らねばと思った。車中から娘の通う中学校に電話をかけ続けたが繋がらない。いつも通っている道路は交通規制で通る事ができず、遠回りをする事になった。普段は家から会社まで片道約1時間かけて通勤しているのだが、地震で道路がボコボコで、その日は約4時間かかった。すでに19時を過ぎていて辺りは真っ暗だ。娘を探しに行かなければの一心で運転し、三角コーンを無視しながら近道をしたら、車のライトの先に人が動いているのが見えた。よく見ると、その人達は腰まで水に浸かりながら「下がれ！」と私に合図をしている。私はやっと津波に気づき、車をバックした。車中では電話をかけたのでラジオを聞いておらず、津波の事を全く知らなかったのだ。車は高台の、津波が寄せて来ているぎりぎりの場所に入ってしまった。多くの人が車を乗り捨てていたの、私もバイパスの下に乗り捨てた。歩いて帰るしかないと思ったが、道はすべて水で塞がれている。月が煌々と照らす夜空からは無情の雪が降り続き、自分の家がある方向を見ると火の手が上がっていた。近くにいた方に聞くと、「門脇町の日本製紙工場だ。火が日和山に移ろうとしていて、日和山も危ない



らしい」と教えてもらった。家が日和山にあるので、「津波は大丈夫だっただろうけれど、私の家も火事で燃えちゃうんだ」と思った。そう思うとますます娘が心配になり、生まれて初めて絶望感を味わった。雪が舞う氷点下の道端で右往左往したが、行く当てもなく、なす術もなかった。娘の安否を確認しなければという思いだけが頭にあり、避難所へ行こうなどとは思いつきもしなかった。

「生かされた」という重み

夜が明け、辺りの惨状が見えるようになった。水の近くまで行くと、まだ水に浸かっている人もいるし、多くの瓦礫が漂っている。漏電だろうか、あちこちの民家で火災が起きていた。路頭に迷っていると、知り合いの建設会社の方が「雪も降っていて寒いし、私のところにいたらどうですか」と声をかけてくれた。炊き出しのお手伝いをしながら、「何とか家に帰りたんだけど、何とかならないかな」と聞くと、「何ともならないね。家に帰るまで1週間くらいはかかるんじゃないかな」と言われ、1週間も娘の安否が分からないままでは気が狂いそうになると思った。地震から3日目の朝、水が引けてきたので、自衛隊車両が入れるように道路の瓦礫を重機で排除しながら、娘の通う中学校までの道を作ると聞いて

た。乗って行くかと声をかけてもらい、「乗ります」と即答した。昼にはやっと家へ帰る事ができた。家族からその間の事を聞くと、門脇町に実家があった義母は早めに逃げて助かり、その後私達の家に避難して来たが、義父は津波が来るとは思わずに逃げ遅れたそうだ。ご近所の男性達は「チリ津波の時に津波が来なかったから大丈夫だ」と、家の片づけのため家に残った人も多かったと聞いた。

それから1週間、私は海の近くに住む兄弟や知り合いの安否確認、食料調達や近所の避難所に洋服を届ける事に必死だった。とにかく助かった人だけでも生き延びなければならない。電気が通って携帯電話が使えるようになった時、100通以上のメールや着信履歴があった。会社で最後まで連絡が取れなかった社員が私だったらしい。石巻に住んでいるので、津波被害にあったのではないかと皆が心配したようだ。「生きていますか?!生きていたら連絡をください!」など、すごい内容のメールが届いていた。自分は無事である事を知らせ、身内の安否を確認してから出社したいとお願いした。

ものすごい数の避難者で、自分1人の力ではどうにもならないと感じたが、それでも何かをせずにはいられなかった。地震から3日目の朝、重機に乗せてもらい石巻中学校まで向かった時、大街道では大量の瓦礫の間にご遺体が浮かんでいたのを見た。おそらくご家族を探されているのだろう、腰まで泥水に浸かりながら、あの寒さの中何百人もの人が疲れきった表情で歩いている姿を見た。あの光景を見た時、私は雪で服が濡れたり、飛んできた火の粉でコートが焦げたりしたけれども、家に帰る事ができる。私は生かされたという重みを感じた。生かされたからには何かしなければならぬミッションがあると思った。娘の安全が確認できてからは、今度は大変な方々のために動こうと、すぐに気持ちが切り替わった。

3.11 未来へつなぐバトン

10日目に入社し、しばらくは会社の復旧作業に追われた。すぐに、何かできる事をしようという話になった。震災前から一ノ蔵には「社会貢献クラブ」があり、マッチングギフトという活動をしている。社員が選んだ寄付先に毎月給料から何口(一口100円)でも自由に寄付できる活動だ。だから、この会社には寄付をする文化が醸成されていたように思う。全国各地からさまざまなご支援をいただき、お返しをしなければという機運がだんだんに盛り上がった。

酒屋なのでご支援をいただいた方々に特別なお酒を造って差し上げ、復旧した様子を伝えるアイデ



一ノ蔵 特別純米生原酒 3.11 未来へつなぐバトン

アもあったが、私はそうした単なるお返しは少し違うように感じた。もっと視野を大きく捉え、私達が受けた御恩をさらに困っている皆さんにお渡しする形で循環させたらどうだろうと提案した。2012年3月11日に間に合うようにお酒を仕込み、その全売り上げをしかるべきところに寄付する事になった。それが「3.11 未来へつなぐバトン」という商品だ。被災した時、正直、この会社はもう駄目だろうと思った。しかし、ダメージを負いながらも無事復活した。さまざまなご支援をいただいて、立派に酒造りができるまでに復旧し、いただいたご支援は違う形で他の大変な方々にバトンタッチするという意味を込めて商品を企画した。また、大震災によってずたずたになってしまった故郷を、私達がこれから子ども達に渡さなければならないと考えた時に、酒屋だからといって酒を飲む成人以上だけを対象とする活動にすべきではないと思った。私達の醸造発酵技術を活かしたものづくりで子ども達のために商品開発をしたいという想いから「3.11 未来へつなぐバトン」ができた。この商品は営業活動をしてからわずか3日で予約完売した。この業界ではあり得ない事だ。それだけ多くの方が共感してくださったのだと思う。一ノ蔵の売り上げ全額は「ハタチ基金」に寄付をした。

企業人として復興に携わる

平日は会社で働き、週末は個人で地元NPOと連携してボランティア活動をした。東京からお芝居をする方を呼んで、無料でお芝居をしていただいたり、首都圏からの視察学習のコーディネートをした。また、チャリティー展を開催し、売り上げを門脇小学校の文房具を買うための資金として寄付をした。今後石巻市がどう変わっていくべきなのか情報を共有するために石巻都市学会に入り、

情報を集めた。2012年、ベガルタレディースが設立される事になって、スポーツを通して子ども達を元気にする事ができないかと思い、理事に就任した。子ども達がなでしこの選手達にサッカーを教わって、スポーツ選手と触れ合うことで、心に温かさが灯ればと願い、活動を続けている。

また、オーガニックコットンメーカーの株式会社アバンティ代表取締役の渡邊智恵子さんが「東北グランマのクリスマスオーナメント」^{※1}という復興プロジェクトを立ち上げたと聞いて、地元なので手伝わせてほしいとすぐに連絡を取った。それから1年間かかったが、幸せお守りをベガルタの応援グッズとして販売する事が決まった。さらに、「東北グランマのクリスマスオーナメント」活動をもっと地元の方々に知ってほしい、グランマたちは仮設住宅にこもって手仕事をしているのでたまには仙台に出てきてほしいと思い、仙台でワークショップを開催した。仙台市泉区のショッピングプラザ「SELVA（セルバ）」のご協力で、センターコートを無償で貸していただき、グランマ達が子ども達と、あるいは親子と一緒にクリスマスオーナメントを作るワークショップをした。これは河北新報にも取り上げていただいたので、ある程度地元の方々に活動を周知できたと思う。首都圏主導で被災地に向けて支援をしてくださっている方々に協力し、地元での支援係として自分は動けると感じた。

1年ほど経過した頃、いろいろな事をやりすぎて体力も気力も資金も無くなってしまい、土日の活動は少し抑えなければと感じた。震災直後はあれほど娘を心配したのに、今は娘を放って土日も活動をしている。「土日のどちらかは家にいて」と娘に言われた事もあり、週末は身体を休め、家族との時間を大切に過ごす事にした。

それからは、企業人である自分の立場を最大限活用して、被災地、社会が抱えている課題を解決していこうと考え、働き方を切り替えた。被災地にある企業なので、被災地の抱える課題をビジネスで解決できればベストだと思っている。

※1 「東北グランマのクリスマスオーナメント」…震災で仕事を失った漁師のお母さん達（東北グランマ）が、オーガニックコットンの残布（ざんぷ：裁断後に余った布）で手作りのクリスマスオーナメントを皆さんに買ってもらい、東北グランマ達を応援するプロジェクト。

20年続ける支援を

私達がいただいたご支援を感謝の気持ちに変えて、2年目も「3.11未来へつなぐバトン」を続けたいと考えた。震災はどんどん風化してしまう。

我々も被災した企業ではあるけれども、せっかくハタチ基金に寄付をするのだから、2011年に生まれた子ども達が成人するまで20年間続けようと提案した。会議では20年間も全売り上げ寄付を継続する事に反対する意見もあったが、寄付額は売り上げの半額でも30%でもいい、続ける事が大切だと訴えた。子ども達のために20年間、こうした商品を世に出し続けた事は私達の誇りにつながるし、こうした企業活動がどんどん広がってほしい。「とにかく取り組む事を決断しましょう」と促した。

結果、「3.11未来へつなぐバトン」を20年間続ける事が決定した。原料米を検討していた折、宮城県大崎市のふゆみずたんぼ^{※2}で飯米を作っていた農家さんが風評被害を受けている事を知った。震災以前は首都圏のお客様への直接販売で生計が成り立っていたが、キャンセルが相次ぎ、このままでは生計が立ち行かなくなると苦悩していた。一ノ蔵では「特別純米酒ふゆ・みず・たんぼ 一ノ蔵」という商品を出しており、地元農家さんには大変お世話になっている。風評被害を今すぐ食い止める事はできないけれども、安全だと証明されたのならば、その原料米を買い取って「3.11未来へつなぐバトン」のお酒を作ったかどうかと会社へ提案し、2012年の酒造りにつながった。たった1軒の農家さんのお米ではあるが、ふゆみずたんぼの生産組合の方々からは「風評被害で苦しんでいる農家さんが多い中で、ふゆみずたんぼを助けていただいた事は自分達の誇りになる」と感謝のお言葉をいただいた。こうした農業支援のあり方も存在するのだと勉強になった。「特別純米酒ふゆ・みず・たんぼ 一ノ蔵」はとても人気のあるお酒だ。農家さんにもっとモチベーションを上げてお米を作ってもらうためには、我々がこの商品を増産していく必要があると考えている。今は秋以降に数量限定で出しているが、ゆくゆくは1年間市場に流通させたい。こうした企業活動を通して、多くのお客様に周知していくミッションがあると思っている。

2013年2月には、ドイツで開かれたBioFach（ビオファ）^{※3}へふゆみずたんぼのお米とお酒を持って出展した。ふゆみずたんぼができあがる田んぼの風景を収めたDVDを持って行った。ヨーロッパと日本の稲作は全く違うし、米の品種も違う。ヨーロッパの人達は自分達の考えている稲作とは全く違う、そして生き物と共生する日本の稲作に非常に興味を抱き、「それで作ったお米がこの酒になるのか、素晴らしい」と共感を得る事ができた。また日本は大震災でめちゃくちゃになってしまったと思っている方も多かったので、農村風景が美しく残る東北へ遊びに来てほしいとアピールをしてきた。

※2 ふゆみずたんぼ…冬期湛水水田。冬の間も田んぼに水を貼り、田んぼに生きる原生物や水鳥など多様な生き物の力を借りて無農薬・無化学肥料で米作りを行なう農法。

※3 BioFach（ビオファ）…ドイツ語で「オーガニック専門」の意。ドイツで20年前に始まったオーガニック展で、現在では世界最大のオーガニック・ナチュラル関連製品展示会。

自ら復興者になる思いを持って

これまで首都圏主導で復興へアプローチする取り組みが多く行なわれてきたが、これからはフェーズで変わってくるだろうし、各地では温度差が生じているように感じる。風化していく事が課題だ。いつまでも首都圏頼みではいけない。小さな取り組みでも自分達が情報を発信して、経済の活性化につながるように取り組んでいかなければいけないと思っている。これまで作ってきたご縁を大事にしながらも、被災者自らが復興者になる心意気を忘れずに活動したい。

震災後に、認定NPO法人女子教育奨励会（JKSK）が主催する「結結（ゆいゆい）プロジェクト車座」^{※4}に3回参加した。石巻の他、南三陸、大崎、気仙沼など、それぞれのエリアで抱える課題に触れ、その課題に真摯に取り組む多くの仲間を得た。また首都圏メンバーから寄せられる無私の協力、後押しは何より心強い。東京新聞、河北新報の各誌面で「東北復興日記」と題して、復興に取り組む姿を記事発信し、多くの方々に紹介する形でつながりが今も続いている事には感謝を忘れずにいたい。

震災から2年が過ぎて、3年目を迎えた。精神的にも疲れが出てくる頃だ。疲れる事は仕方ないと思うが、決して方向性を見誤る事がないように、ゴールはどこにあるのかを常に意識して仕事をすべきだと、課題としていつも意識している。震災特需で売り上げが伸びたが、この時期にきて沈静化している。企業なので利益を追求するために「支援」「寄付」から離れて、売り上げ回復に躍起となるかもしれない。それもビジネスには必要だが、より地域、地元に着目した一ノ蔵らしい商品企画や情報発信がますます重要になってくると思う。そのために大切なのは「構想力を磨く」事だ。アイデアをどんどんブラッシュアップして、会社の貢献にもつながりかつ社会貢献にもつながる働き方、あるいは商品の打ち出し方を常に考えていかなければならない。今後は私だけ、一ノ蔵だけ、ではなく、多くの方々と協働する事が大切になると思うので、ますますネットワークを広げていきたいし、そのネットワークを強力にしていきたい。



幸せ御守（株式会社アバンティ提供）

とにかく大事なのは「継続する」事だと思う。復興を果たせたと感じるまで、続ける事が必要だと思っている。本当は復興のステージに入っていないかもしれない時期だと思うが、女川、雄勝、石巻、陸前高田など津波による甚大な被害を受けたところに足を運ぶと、瓦礫が無くなっただけで、あまり復興が進んでいるとは実感できない。時々、娘を連れて各地を訪れる。非常に大変だった時がフラッシュバックしてとても苦しい思いをするが、それでもこの心の痛みを忘れてはいけないと思っている。なぜ私達の故郷にこうした事が起こったのかと恨み言を並べるのではなく、もし他地域で大きな災害が起きた時に私達の体験が他地域の参考になればよいと思っている。そのために軸になる思いを持って、その思いがぶれないように時々被災地を訪れて振り返りながら仕事をしていきたい。

※4 認定NPO法人女子教育奨励会（JKSK）「結結（ゆいゆい）プロジェクト」…東日本大震災を機に、東北の女性リーダー達が持てる能力を存分に発揮し、取り組もうとしている復興活動を首都圏のエキスパートと共に考え、共に支援・協力・応援をしていくために立ち上げられたプロジェクト。

大震災を振り返って

義理の父を亡くし、多くの友人知人を見送った。47歳にして人生観が大きく変わった出来事だった。働き方に対する考え方が大きく変わったし、経済ありきの幸せのものさしが実は間違っていた事に気づかされた。個人だけの欲望にお金を使うのではなく、一部を他の人に回す事によって自分というちっぽけな人間でも人様の役に立つと実感できた。思い出せば泣けてくる事はたくさんあるし、いまだに被災地を訪れば涙も出るが、それらの痛みはこれからここをどうすれば良くできるのかとアイデアに変えていかなければならないと

思うようになった。「負けないぞ」の気持ちでいようと思っている。自然界にとっては摂理であるし、文明の利器で跳ね返すのではなく、自然とうまく寄り添って生きていくためには、私達人間がどうあるべきなのか、人と人のつながりはどうあるべきなのかと考えさせられた。

私がか社で働けるのはあと10年だと思っているが、自分の働き方をソーシャルビジネスとしてシフトしようと決めた時から目標が2つある。一ノ蔵の商品を使って寄付文化を醸成する事と、エシカル消費を促進する事だ。「消費行動を変えるマーケティング」を自分の仕事の軸に置きたいと考えている。私は一ノ蔵の社長ではないが、一ノ蔵のこうありたい姿として「10年後、一ノ蔵はその事業や商品を通じて、地域社会の抱える課題解決を目指して、希望を生み出せる企業」を思い描いている。



ドイツ ニュルンベルク オーガニック・ナチュラル関連製品展示会「BioFach (ビオファ)」



撮影：2011.3.11 宮城県大崎市 (千田信良さん提供)



燃料を重機へ供給した (千田信良さん提供)



撮影：2011.5.14 宮城県大崎市
菜の花フェスティバルinおおさき (千田信良さん提供)



地域のリーダーを育てたい思いから積極的に
見学受入を行なっている (千田信良さん提供)